

“和ろうそく”の歴史

日本では、室町時代から^{はぜ}檜の実を原料にした和ろうそくが作られるようになりました。

和ろうそくは次第に人気を博し、江戸時代後期から明治時代にかけて使用量のピークを迎えます。しかしその後、西洋ローソクが流通し、さらに電気が一般に普及するにつれて、和ろうそくの需要は減少していきました。

しかし、西洋ローソクと比べると和ろうそくの火は消えにくく、すすが出にくいという特徴があります。さらに大きく揺れる炎は神秘的で、癒やし効果もあります。また、一本一本職人による手づくりで、日本の四季などが描かれており、味わい深いものになっています。現在は、インテリアや贈りもの、お土産などにも人気があり、国内外問わず愛されています。

松花堂庭園の檜の木

和ろうそくの原料として用いられる檜の木。実は松花堂庭園にもあり、秋には美しく色づきます。一体どんな木なのでしょう？？庭園に出かけて探してみましよう！

「京都”悠久の灯” (あかり)プロジェクト」 ～先人たちのあかりを 京都からみらいへ～

和ろうそくの原料である檜の実の生産は、自然災害の影響などもあり減少傾向にあります。原料を安定して供給するため、京都市と民間業者によって「京都”悠久の灯”(あかり)プロジェクト」～先人たちのあかりを京都からみらいへ～が立ち上がりました。

和ろうそくの文化を今後も継承していくべく、活動が続けられています。

